様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６８７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３８０７１１

研究課題名（和文）現代日本における昭和ノスタルジア志向の実証的研究

研究課題名（英文）Nostalgia for the Showa era as a social orientation

研究代表者
浅岡　隆裕（ASAOKA, TAKAHIRO）

立正大学・文学部・准教授

研究者番号：１０３５０２９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：1990年代以降、日本社会に継続的にみられる、昭和年代、とくに昭和30年代が「貧しかったけど、希望に満ち溢れていた」といった肯定的なイメージで語られ、一定の支持を集めている「昭和ノスタルジア」現象。本研究では、そうした過去への郷愁志向と社会意識の実証的な検証を行った。
過去に対する郷愁は、当時を経験した者では懐古という心情から理解できるが、直接体験していない若年層の世代でも、この時代を理想化し憧れを持つ人が一定数存在することが明らかになった。若年層における昭和の理想イメージの形成については、家族成員間コミュニケーション、メディアの影響、他の社会意識との関わりが寄与していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Since the last half of the 1990s, nostalgia for a romanticized past Showa era, especially the 30s, has become a social phenomenon. In our research, we examine empirical evidence of the connection between people’s social awareness and nostalgic feeling.
Older generations may be steeped in nostalgia for their direct experiences and memories, but why are younger generations flooded with nostalgia when they have no experience? There are certain young people who have a romantic notion of the old because they are influenced by their families -grandparents or other relatives who embody the concept of the Showa era. Additionally, we suggest that media content that gives the impression that the old Showa era represents the ‘good old days’ may potentially influence their feelings. Other social awareness, for example, higher priority given to private life over other domains, fellowship with neighbours, or eco-conscious thinking could affect the onset of idealization of the Showa era in the 30s.

研究分野：社会学

キーワード：昭和ノスタルジア　社会意識　昭和30年代　記憶　メディア　インターネット調査　昭和のくらし　体験

研究成果の概要

１．研究開始当初の背景

1990 年代後半以降の日本にみられる昭和懐古の現象は、ブーム＝流行という割には、長期にわたって持続しているという特色がみられる。しかも高齢者層に広くみられるように自分たちの生きてきた過去への懐古といった現象にとどまらない。昭和 30 年代を直接体験していない若年層においても、過去の時代に憧憬を持つといった状況が散見されることは注目に値する。昭和 30 年代に関するノスタルジア対象についての記憶やイメージは何らかの形で存在することになるが、直接体験以外の源泉は、親から子、あるいは祖父母から孫へといった世代間コミュニケーションの他、「学校、法廷、博物館、メディア」といったものに特定される。

高齢者には “実際の体験”“記憶の中”、そして“イメージの中”といった昭和 30 年代についての認識の三層構造が見られることが想定される。記憶研究の著名なテーゼ「過去は保存されているのではなく、現在の基盤の上で再構成され続けている」（Halbwachs 1950=1989）を持ち出すまでもなく、記憶としての昭和体験はそのままの形で保持されているわけではない。むしろ再現される状況や刺激として付加されるイメージに応じて、記憶は変化する。従って、当時体験者にとっての懐古と言っても、当時の実態そのものに反応しているわけではないのである。

そして若年層にみられるようなコミュニティへの憧憬は、昭和年代の家族の団らんや地域コミュニティが保持していたとされる人間的なつながりのユートピア的な観測の上に成り立っていると想定される。昭和 30 年代へのポジティヴな態度（「昭和ノスタルジア志向」と表記）は、他の社会的な態度（例えば、社会的なつながり願望、自己承認欲求の強まり）と分かちがたく結びついて、新たな価値態度やライフスタイルのジャンルを醸成している可能性がある。こうした点で、昭和 30 年代のイメージについての探求は、極めてアクチュアルな研究テーマといえる。

２．研究の目的

本研究の目的は、過去を憧憬の対象とする≪ノスタルジア≫といった集合的感情についての実証的探求である。

先述の通り、現代日本におけるノスタルジアの発現としては、「昭和的」とされる価値観や暮らしへの憧憬、もっと具体的に言えば昭和 30 年代への郷愁や懐古といったものがみられる。それが一時期のブーム＝流行にとどまらずに、他の社会的態度と結びつき、特定の志向あるいは価値態度というカテゴリーを構成しているのではないかと考えられる。それがいかなる構造で現代社会に成立しているのかについて社会学的分析を加える。当該現象についての先行研究では、昭和 30 年代を表象するメディアなどの分析が見られるものの、生活者側での受容といった重要な側面に焦点を当てた類似の実証研究は皆無であり、その解明に注力する本研究は独創性を有するといえよう。

３．研究の方法

最初に先行研究のレビューにおいて重要と考えるのは、<記憶>と<メディア>の問題系である。これらの先行研究から主な論点を吸収しつつ、研究フレームを構築する。過去の記憶やイメージ形成に関わるメディアや他の要素の影響について、日本のみならず、欧米の知見をレビューしておく。さしあたり横軸（空間的）と縦軸（時間的）それぞれでの比較といった視座を据える。横軸の観点からは、過去を郷愁の対象とする傾向がみられる事象の空間的な比較が重要であろう。同じ昭和 30 年代の日本といっても地域によって状況が異なっており、空間的（地域的）な偏差の存在が想定される。縦軸ではノスタルジアの対象とされる時代軸（昭和○○年代、19○○年代といった区分とその内包＝想起イメージ）、および懐古する世代での比較といったことが中心となろう。

先行研究レビューや情報収集という予備作業を通じてリサーチ・スキームを構築し、ドキュメント分析、統計調査、インタビュー調査といった手法を用いて実証研究を行う。

まず、<インタビュー調査>とは、関係する当事者・対象者の声を収集するものである。仮説探索的な目的での活用であり、仮説につながるような情報収集に重きを置いている。

パーソナルインタビューの対象とするのは、昭和へのノスタルジア志向を強く示している個人であり、個人のライフヒストリーおよびその活動についてのデプス・インタビューを行う。当時者の語り（ナラティブ）には、語り手である個人の見解というよりも、「マスター・ナラティブ」と呼ばれる、その時代や社会、語られる文脈が強く刻印されている「典型的な語り方」の出現が予想される。

本研究では、昭和時代の暮らしや価値観に共鳴していると思われる集団、具体的には、東京都内の昭和の暮らしを展示のメインテーマとしている私設博物館の友の会メンバーに対して聞き取り調査を行い、調査対象者の語りの語彙から昭和的な価値観との親和性を確認した。こうして得られた仮説をもとに、昭和時代についての認識やイメージの構造を探ることを目的に一般人（インターネットパネル）に対して調査を実施した。

また、昭和年代について言及したメディア表象のメッセージ分析を行っている。調査対象としたのは、地域社会において、昭和 30 年代を含む昭和年代に焦点を当てた数々のプロジェクト・取組である。公刊、展示されているものの特性を読み解き、現地での観察

や関係者に対するヒアリング調査を行い、当地住民における意味づけについて検証した。

４．研究成果

（1）先行研究と社会背景の整理

「ノスタルジア」や「集合的記憶」、「社会的記憶」、あるいは隣接の心理学分野の「なつかしさ」の研究については、知見の蓄積がある。そして学際的研究分野としての記憶研究（Memory Studies）が、1990 年代以降、隆盛しており、本研究もそのディシプリンに多くの示唆を受けている。

過去の特定の時代へ憧憬＝ノスタルジアが喚起されるような社会思想的な状況・文脈とはいかなるものか。これらは、1990 年代以降の東西冷戦終結後に急速に進展したグローバリゼーション、新自由主義、新保守主義といった政治・経済情勢、そして政治経済体制によって惹起された諸変化「社会の液状化」「リスク社会化」などと相互に密接の関わり合いを持っていることは容易に想定されうることである。

経済成長重視や効率性追求一辺倒の世相に対するアンチテーゼとして、ユートピア的な存在としての過去が持ち出されることはこれまでも社会変動期にはしばしば見られたことである。特定の時代（例えば、イギリスでは 19 世紀のビクトリア朝時代や 1960 年代）や共同態としてのコミュニティが思想的に見直されているのは、「成長から成熟へ」とシフトチェンジすべきだという論がよく語られる日本だけの現象ではないことにも留意したい。こうした思想的な社会的底流があったところに 2011 年 3 月の東日本大震災という未曽有の自然災害が発生し、人との絆やコミュニティ重視という流れがまた強まって、今日に至っている。

（2）地域の中での昭和 30 年代という資源

近年、昭和年代とくに昭和 30 年代の過去の記憶やそのイメージが取り上げられることが多い地域社会という文脈に即して、それが取り上げられる意義の考察から始めたい。

最初に、市区町村や字といった単位での地域社会における昭和 30 年代の表象と受容について検討した。昭和 30 年代に関わるイメージや実態的なもの・コトが、“失われてしまうもの”あるいは“失われたもの”として表象されることによって、何が目指されるのか。

各地の公立郷土博物館（資料館）が現代史を展示するメディアとして機能し始めている。博物館の中でも中心的位置を占める国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）に、第 6 展示室として「戦後の生活革命」が 2010 年 3 月にオープンし、日本住宅公団団地実物を再現した他、展示の充実を図った。この動きに連動するように、2000 年代以降、常設展示において戦後の生活資料の展示を充実させるところが目に見えて増加している。各地の地域特性を活かした展示に注力しているところが多い。常設展示以外にも、展示施設の“周年イベント”で行われることもしばしばである。また小学校の「総合学習」と連動する形で企画展示がなされる場合もみられる。

学習の対象や地域の歴史として受容するだけではなく、昭和 30 年代を“地域資源”として捉え返し、地域活性化などに寄与しようという動きもみられる。写真集の発行やオーラルヒストリーの記録といった地域住民の取り組みに繋がっている。

映像を使った過去の地域の掘り起こしはいくつかに類型化されるが、視覚的表象やそれにまつわる語りなどを受容することで、当該エリアに関わる人（住民だけでなく、元居住者や訪問者、興味関心を持っている人を含む）において「記憶の共同体」（Bellah, R N）が形成される可能性がある。たとえば、独特のローカリティや歴史を有するエリアがあった場合には、なぜ周辺地域に比してユニークな存在なのかについて、特異な歴史性の表象を通じて後付的に説明されるといった例が想定される。

以上みてきたようなケースは地域の内部的な視点である。地域外部に対しての社会的効果としては、近年では、「むかしまち」といった文化的キーワードが頻出し、ノスタルジックやレトロといった記号が付加されることによって、観光集客につながっていることも見逃せない。そして、こうした現象は、中高年対象のメディアだけではなく、若年層ターゲットのメディアにおいても、独特の語りとして頻出するものになっている。

地域社会の内外にわたって、地域資源を編集し、内外の関係性を維持、強化し、つなぎとめる装置として昭和 30 年代という意味記号が機能している。つまり地元にとっては、過去の記憶やイメージが「再コミュニティ化」の資源となっていることも考えられる。

現状、地域社会における昭和 30 年代の表象は、展示や写真集、書籍の刊行といったアナログなメディアでの展開が中心である。しかしこれらの活動だけでは、流通面で到達範囲という点では広がりに欠くことも事実であろう。今後は、デジタルアーカイブとして公開し、リアルな場での展示やワークショップ、イベントなどを通じて、地域社会の中でどのように共有化できるのかが、こうした営みの課題となるのではないか。

（3）博物館友の会会員の意識と実践

2000 年前後から継続している「昭和ノスタルジアブーム」は、主に昭和 30～40 年代を中心として、当時の文化、生活、風俗などが注目されたメディア文化現象である（日高 2014）。本節では、そのようにメディアを介した昭和イメージが流布する現代社会において、一過性のブームではなく、昭和時代にあったと思われる価値観や行動に範をとり

自らの実践に結びつけるような動きが一部にあることを確認し、その実態と形成プロセスを明らかにする。

この目的のために、2016 年より、東京都大田区にある昭和 30 年代の家屋や家財道具が保存・公開されている私設博物館・昭和のくらし博物館（1999 年開館、館長・小泉和子氏）で調査を行った。この博物館は約 140 名の「ファンクラブ」と称される会員組織（友の会）を持ち、特色ある活動（祭り、昔ながらの家事の実践など）を継続している。「昭和のくらし」をテーマにした博物館の活動に積極的に関わる人々は、一般の人々よりも昭和時代への関心が高く、ノスタルジア意識も強く持っていることが想定されたためである。実施した調査は以下の 3 点である。

①友の会会員全体に対する郵送アンケート調査（2016 年 8 月～9 月実施）

②友の会会員向けの会報誌（不定期刊行）の内容検討

③友の会中心メンバーへの聞き取り調査（2016 年 6 月～8 月実施。男性 6 名、女性 9 名。年代は 20 代から 80 代。）

以下では、中心メンバーへの聞き取り調査から明らかになったことを述べる。

（a）友の会に参加する動機

博物館を訪れたきっかけは、館長の著書や記事を読んで目的をもって訪れた人と、近所に住んでいたなどの理由から、たまたま訪れた人がいたが、何らかの魅力を感じて友の会に入会し継続していることは共通している。友の会を継続している動機は多様だが、特に人とのつながりの魅力が強調される。ある 60 代女性は、「ここにいなければ出会えない人に会えるのがたまらなくて通っている」と語る。また、昭和時代に関する造詣が深い館長に直接話を聞くことができることを魅力とする声もある。

友の会で知り合った人と旅行や観劇といった、友の会以外で交流する人もおり、人づきあいは「疑似コミュニティ」として表現されている。ある 40 代女性は、「ここで何か疑似コミュニティっていうか、本来は地域でもそういうものがあってもいいような、そういうご近所付き合いに似たものをちょっと感じる」ことがあると語っていた。また、ある 20 代女性は、同世代と話していると流行の話をしなくてはならず疲れてしまうが、「ここに来るとそういう、ハイテクなこととかこだわらなくて、素、ありのままの自分でいていいんだって言う気持ちにはなるんですよね。」と語っていた。これらの語りからわかることは、友の会が居場所としても機能していることである。

現在、友の会での活動は、会員の高齢化やライフサイクルの変化により、かつてほど盛んではないが、長年続いた友の会主催の祭などの活動の記憶そのものが、会員たちにとっては「楽しかった思い出」として共有される構造になっている。それを支えているのが博物館の建物や庭という具体的な場所である。

（b）ノスタルジアを感じさせる場所

近年、各地の博物館や郷土資料館の一角で、ちゃぶ台と初期のテレビを配置し、昭和時代の茶の間の光景を再現し、ノスタルジックに演出することが散見される。多くの場合、再現展示は一部の空間を区切ったものであるが、昭和のくらし博物館の場合、当時の建物と家財道具を「そのまま」使用しているため、よりリアルな空間になっている。

友の会会員全体へのアンケート調査結果では、博物館に初めて来たときの感想として「懐かしい」というものが最も多かった（65%）。聞き取り調査でも、最初に訪れた時の印象として、実家や祖父母の家のようだという声が多く聞かれた。友の会中心人物 A 氏（60 代男性）は、「ここは懐かしい時間や空気や気配を感じられる場所」であると語る。博物館に来ることで、かつて遊んだ友達の家、といった個人的な思い出にまつわるノスタルジアが喚起されるという。

またある 50 代女性は、「感覚的に一番懐かしさを感じるのは匂い」であるとし、古い建物の匂いや生活臭によって、過去の記憶が刺激され呼び起こされると語っている。

友の会会員に好まれる場所のアンケート結果では、縁側、茶の間、庭、子ども部屋といった場所が挙げられていた。ちゃぶ台の置かれた茶の間は昭和のくらしの象徴的な空間であり、縁側と庭は夏祭りの会場になり訪れた人々が交流する場所として人気が高かったと考えられる。縁側、茶の間、庭はいずれも現代の住空間からは姿を消しつつあり、ノスタルジアを感じさせる場所である。

（c）実践する場所としての博物館

博物館は様々な活動の場所としても捉えられている。味噌作りやはたきを使う大掃除などは、実際に手を使ってやってみると面白いものとして、特に若年層には受け入れられている。

友の会会員は昭和のくらしへの関心、評価共に高いが、自身の生活において日常的に実践している例は多くはない。できることなら実践したいが、時間的制約から困難とする場合が多い。その分、博物館で体験できる昔ながらの大掃除などの機会が貴重なものになっている。

（d）メディアとの距離

昭和時代への関心の背景には、自身の生育環境（祖父母との同居、木造建築に住んでいたなど）が影響していることが多かった。直接的な経験がない場合、メディアを通じて得た昭和のイメージを受容する場合もあるが、昭和ノスタルジア映画の代表格である「ALWAYS 三丁目の夕日」（2005）の受け取り方は、「表面的な感じ」、「美化されたもの」としてやや冷めている傾向にあった。昭和時代を再現した現代の作品よりも、当時製作さ

れた古い作品の方が「安心して観られる」（30代女性）という声もある。ノスタルジアに対して「昔はよかったばっかりしゃべってるのもどうかな」（40代女性）という声もあった。

（e）昭和30年代と現在の暮らし・社会関係

当時を直接体験した人は、昭和30年代のくらしに戻るよりは現在のくらしの便利さや快適さの方がいいと語る。異臭、大気汚染などの環境の悪さ、大量生産大量消費＝使い捨て、リサイクル意識、安全意識の欠如といったマイナス面が挙げられた。

これに対し、当時を直接体験していない世代の方が、現在の便利すぎる生活に対する不満を述べている。「昭和の暮らしを評価するかっていうと、僕は非常に評価しますね。あれで十分暮らせていたっていう面がたくさんあった」と50代男性は語る。また、現代社会は時間的余裕がないことが指摘された。

生活の仕方や工夫について、30代女性は「今の時代でなんかこう難しいな、と感じることが、過去には何でできていたんだろうみたいな、参照する先みたいな感じで」昭和のくらしがあるのかもしれないと語る。60代男性は「子ども同士、親同士、地域ぐるみのコミュニケーションがあった」と語り、不安感の増す現代において、一つの参照点としての昭和30年代像が共有されている。

（f）友の会活動と昭和時代への意識の変化

博物館を訪れ、友の会活動に積極的に参加することは、昭和の暮らしへの関心を高めている。元々昭和時代の事物に関心があったわけではなかったと語る30代女性は、「ここの博物館で知ったものがイコール私の中で昭和っぽいもの」であると語り、「ここの博物館で出会ったもの、いいものは自分の中で取り入れる」ようになったと語っていた。40代女性は、手間暇をかけて家事をすることは、今の時代には難しいことではあるが、「そういうもの（数時間かけて作るおはぎ）を手間暇かけて作るのっていうのは非常に豊かなことだ」と感じるようになったという。

友の会会員は全体として昔のものや昭和時代への関心が高く、とりわけこの博物館のテーマになっている「暮らし」への評価は高い。昭和30年代の暮らしが「丸ごと保存」されている博物館を訪れることは、実体験に基づく懐かしさや、「祖父母の家のようで」懐かしいという感情を喚起するきっかけとなる。若年層は実体験はないものの、祖父母や両親を通じて世代間継承された知識や感性があり、これらは映像メディアによる影響・作用よりも強く規定しているようであった。友の会に入会し、同じような趣味、志向の人々と交流し、様々なイベントを体験することで、昭和についての（ここでは特に昭和30年代の暮らしについての）ポジティヴな意識が醸成され、実践に結びついていく場合もある。実際に生活の中で昭和の暮らし方を取り入れている人は、友の会会員であっても少数派であったが、語りの中では、各人が捉える「昔はあったが今では失われてしまったもの」が言及されており、現代社会において今後の暮らし方を考える参照点として昭和時代を見る眼差しが共有されていることが明らかになった。

（4）量的調査の知見

このプロジェクトの期間内に、3回の量的調査が実施された。まず2016年の8月から9月にかけて、昭和のくらし博物館の友の会会員を対象とした郵送アンケート調査、次いで2016年9月には一般のインターネットユーザーを対象としたWebアンケート調査（以下、「第1次Web調査」）が実施された。そして2018年2月に、再びインターネットユーザーを対象としたWebアンケート調査（以下、「第2次Web調査」）が実施された。

①第1次Web調査の知見

第1次調査は、日本社会における一般的な傾向を探る目的で実施された。調査対象は日本に在住する20～70歳の男女1,000人で、性別・年代・地域によって80ブロックに分け、国勢調査における人口構成比に準ずるようにサンプル数を決定した。なお、実査は調査会社に委託して行った。

調査から得られた知見として、第一に、古い時代のものに対する態度について、いくつかの特徴がみられた。まず挙げられるのは古い時代の「建物や街並み」に対する関心の高さで、回答者の約6割が魅力を感じていた。これに関連して「建物や街並みを鑑賞する」回答者も32.2%と高い割合を示した。一方で「古いものをコレクションしている」回答者は1.8%と低かった。。

第二に、昭和に対するイメージにおいても「よいイメージを持っている時代」を尋ねたところ、最も多かったのは「昭和50～60年代」（36.3%）、次いで「昭和40年代」（24.9%）という結果の一方、「昭和30年代」は14.0%にとどまった。

第三に、昭和30年代のイメージについてあてはまる言葉を尋ねたところ、「質素である」（36.1%）、「活気がある」（33.8%）、「暖かい」（27.5%）、「貧しい」（26.1%）という言葉が多く選ばれた。「質素であるが活気があり、暖かいが貧しい」という昭和30年代の光と影を表すような結果となっている。「昭和30年代と比べて、現在では失われたり衰えたりしていると感じること」について尋ねたところ、最も多く挙がったのは「近隣の人々とのつきあい」だったが、その割合は63.0%にとどまった。次いで回答が多かった「ものを粗末にしない姿勢」はさらに割合を大きく下げ、49.5%だった。

第四に、昭和30年代に対する評価はある程度高いとうかがえた。昭和時代、特に昭和30年代に見習うべきことがあるかという質

問に対して、「見習うところが多い」（13.6%）と「ある程度見習うところがある」（45.3%）を合わせると、回答者の約 6 割が昭和 30 年代に見習うべきものがあると考えていることになる。具体的にどの分野について見習うべきと考えているかという質問では「教育・しつけ」（62.8%）と「モラル・道徳」（56.4%）という回答が多かった。大げさな表現だが「昭和の精神」について見習うところがあると考えているのでないかと推察される。

②第 2 次 Web 調査の知見

第 2 次 Web 調査は、昭和 40 年（1965 年）以降に生まれ、昭和 30 年代の実体験を持たない「非ノスタルジア世代における昭和志向の実態」を探る目的で実施された。

調査対象は第 1 次 Web 調査と同じく、日本に在住する 20～79 歳の男女 2,078 人で、性別・年代・地域によって 80 ブロックに分け、国勢調査における人口構成比に準ずるようにサンプル数を決定した。

以下、調査から得られた知見を紹介する。

第一に、昭和 30 年代と 1980 年代のイメージについて、同じ選択肢を用いて尋ねたところ、昭和 30 年代は「質素である」（42.3%）が「暖かい」（29.0%）、「活気がある」（28.8%）時代というイメージで、1980 年代は「活気がある」（46.6%）、「華やかである」（35.8%）、そして「自由な」（22.4%）時代というイメージだった。活気がある時代というイメージの一方で、「質素」で「暖かい」昭和 30 年代、「華やか」で「自由な」1980 年代という違いがみられた。

第二に、「ミニマリズム」や「断捨離」のような、「昭和の暮らし」と類似する側面を持つライフスタイルのキーワードについて認知度を尋ねたところ、意味を知っている割合が最も高かったのは「DIY」（76.9%）で、次いで「地産地消」（75.5%）、「断捨離」（74.6%）の順だった。また例えば『散歩の達人』や『クロワッサン』のようなライフスタイル誌の閲読状況を尋ねたところ、どの雑誌についても「ほぼ毎号読んでいる」という人は 1%前後という低い割合となった。ライフスタイル誌とは別の情報源からライフスタイルに関する情報を得ているであろうことがここから推察できる。

第三に、「過去の日本社会はよかった」と思うことがある回答者は全体の約 6 割にのぼった。ただし「よくある」は回答者全体の 9.3%で、多くは「ときどきある」（49.9%）という回答だった。では、いつの時代の日本社会がよかったのかを調べるために、昭和 30 年代と 1980 年代について、見習うべきところがあるかを尋ねた。「見習うところが多い」と「ある程度見習うところがある」の回答を合わせると、昭和 30 年代は 57.3%、1980 年代は 45.7%となった。近年になって 1980 年代の文化が注目を集めているが、見習うべき時代としては昭和 30 年代の方が上であるという結果となった。

【文中の参考文献】

Bellah, R N., 1985, Habits of the Heart : Individualism and Commitment in American Life, Univ of California Press （＝1991、島薗進他訳『心の習慣－アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房）

Davis, F., 1979 Yearning for Yesterday：A Sociology of Nostalgia, The Free Press （＝1990、間場寿一ほか訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社）

Halbwachs, M., 1950, La Memoire Collective, PUF （＝1989、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社）

日高勝之、2014、『昭和ノスタルジアとは何か』世界思想社

.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

浅岡隆裕、2018、「年代差からみる昭和時代についての意識と態度」『立正大学大学院文学研究科紀要』第 34 号、27～52 頁

〔学会発表〕（計　3　件）

浅岡隆裕　青木久美子、2016、「現代における『昭和ノスタルジア志向』に関する一考察」（第 89 回　日本社会学会大会 2016/10/08）

青木久美子、2017、「現代における昭和時代についての意識（1）—ある博物館の友の会会員を中心に—」（第 90 回 日本社会学会大会 2017/11/05）

浅岡隆裕、2017、「現代における昭和時代についての意識（2）—一般人を対象とした定量分析結果から—」（第 90 回 日本社会学会大会 2017/11/05）

〔図書〕（計　1　件）

浅岡隆裕、2018、「地域社会における近い過去の歴史表象の意味」原田健一・水島久光編著『手と足と眼と耳－地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究』学文社、70～87 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

浅岡隆裕（ASAOKA，Takahiro）　立正大学文学部准教授　研究者番号：10350290

(2)研究分担者

田端章明（TABATA，Fumiaki）　立正大学人文科学研究所研究員）
研究者番号：60727840

(4)研究協力者

青木久美子（AOKI，Kumiko）　明治学院大学非常勤講師